
~ NARUTO ~ 最強転生小説九尾の申し子話

多摩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「NARUTO」最強転生小説九尾の申し子話

【Nコード】

N15090

【作者名】

多摩

【あらすじ】

あの時、もしもワンピースの世界に転生して居た主人公のシズナが神様の夏舞が失敗してワンピースの世界じゃなくNARUTOの世界で主人公のナルトに成り代わったら！！

この小説は不定期更新です。

後、小説のタイトル変更しました。

プロローグ（前書き）

少し、改変しました。

プロローグ

私は、確か死んだはず……

「ごめんなさい。」

「はい？」

「えーと、本当は私はあの時死ぬはずじゃなかったと言う事ですか。」

「はい、そうです。」

「まあ、死んでしまったのはしょうがないから良いですけどこれから、私はどうなるですか。」

「貴方には、違う世界に行って貰います。」

「ちなみに、何処に行くんですか。」

「ワンピースの世界で、主人公のルフィの兄に転生して貰います。」

「死亡フラグ満載じゃないですか。」

「なので、チート能力を複数くれる事にしました。」

「じゃあ、まず、一つ目NARUTOの忍術・幻術・体術を世界1の使い手にする。二つ目チャクラ無限にする。三つ目写輪眼・万華鏡写輪眼・白眼・直死の魔眼を合わせた目をデメリット無しで使える様にする。四つ目容姿をNARUTOの四代目火影のミナトの幼少時代の容姿にする。五つ目某史上最強の長老レベルの身体能力と超回復能力にする。」

「分かりましたでは、転生させますね。」

シズナは、光に包まれて消えた。

「ああああああ、ワンピースの世界じゃなくてNARUTOの世界でしかも主人公のナルトに成り代わりさせてしまった………まあ良いか。」

そして、シズナのデコボコ忍者生活が始まった。

プロローグ（後書き）

まあ、変わってます。

主人公設定（前書き）

更新です。

主人公設定

名前 渦巻 シズナ

本名 波風 シズナ

身長 154 cm

(第一部の頃)

体重 46キロ

性別 男

容姿

金髪のロングで、ポニーテールで瞳の色は青色で顔立ちはミナト似です。

性格

冷静沈着・頭脳明晰・運動神経抜群・温厚・キレたら物凄く怖い

チート能力

一つ目：忍術・幻術・体術などを、世界一の使い手にする。

二つ目：チャクラ無限にする。

三つ目：容姿を、四代目火影のミナト似する。

四つ目：写輪眼・万華鏡写輪眼・白眼・直死の魔眼を合わせた目を

デメリット無しで使える様にする。

五つ目：某史上最強の長老レベルの身体能力と超回復能力にする。

設定

ある日、子供をかばって車に引かれて死んでしまつて白い空間で神様の夏舞に会つて本当はワンピースの世界に転生する筈が何故かNARUTOの世界に転生してしかも主人公のナルトに成り代わつてしまった。

第一章（前書き）

連続更新です。

第一章

暗い、誰かの声が聞こえた……

目を徐々にかけて見たら眩しかった。

ああ、そう言えばワンピースの世界に転生したんだったとにかく周りを確認すると金髪の髪をした男性が居た。

『おぎゃあ（誰だこの人、ワンピースの世界に居たけ？）』

シズナが、考え事していたら金髪の男性がシズナを赤色の髪をした女の人に渡して金髪の男性はもう一人の赤ちゃんを抱いて赤色の髪をした女の人の所に来た。

「ねえ、クシナシズナは僕似でルナは君似だね。」

「本当ねえ、ミナト。」

『おぎゃあ。（クシナ？ミナト？ワンピースの世界じゃなくてNARUTOの世界かよしかも私はナルトに成り代わってしまった見たいですし。しかも何故か妹が居る見たいですね。）』

シズナが、そんな事を考えて居た時……

「キヤアア。」

「ギヤアア。」

「ビワコ様・タジ

ビワコ・タジがいきなり倒れた時妹のルナは黒が交ざった水色の髪をしてさきが尖んがって居る鳥見たいな仮面を付けた人に抱き抱えられて居た。

『おぎゃあ。（だ、誰だよこの人マダラじゃない。）』

「四代目火影ミナト……人柱力から離れて下さい赤ん坊が死んでも構わないならねえ？」

「ルナ！！（何者だこいつは、この結界をどうやって入って来たんだしかも選んだ暗部は選りすぐりのエリートだよ。）」

ミナトが、考えて居た時クシナから九尾が外に出よとして来た。

「グッ、うつ！！」

「ツクシナ。（どうしたらまだ、九尾の封印が……）」

「早く、人柱力から離れると言って居るんですよ。赤ん坊がどうなっても良いのか？」

「ま、待って落ち着くんだ！！」

「落ち着くのは、貴方ですよミナト。」

「グッ！……うつ。」

「流石四代目火影ミナト貴方は、最高に冷静だ。」

「ルナ！！」

クシナが、叫んだ時ミナトが謎の仮面の男の一瞬の透きを狙ってルナを助けた。

「流石、黄色い閃光だがこれはどうでしょうか。」

バシユ、起爆札が爆発した。

「ミナト！ルナ。」

「流石、黄色い閃光飛雷神の術で逃げたか。」

謎の仮面は、シズナの方に来た。

「おぎゃあ！（やばいよ。）」

「次は、君だね君もミナト見たいに退場して貰うよ。」

また、起爆札を貼られそうになった時ミナトがルナを家に置いて戻って来てシズナを謎の仮面から奪還してまた飛雷神の術を使ってルナが居る家に戻った。

「ふう、シズナ・ルナ此处で待つて居てねすぐにクシナを連れて来るから。」

と、ミナトはそう言ってクシナを探しに向かった。

第二章（前書き）

また連続更新です。

第二章

40分後、ミナトがクシナを連れて帰って来た。

「此処なら、安全だよ。」

「そうね、シズナ・ルナ。」

「クシナ、シズナ・ルナを頼む。」

「分かったわ。」

「行って来るよ、シズナ・ルナ。」

ミナトは、そう言って飛雷神の術を使って消えた。

「シズナ・ルナ、ごめんねえ。」

「おぎゃあ（泣かないで、母さん。）」

シズナは、クシナの顔から出て来た涙を手で拭いた。

「フフ、そうよね泣いてられないわよね。」

クシナは、シズナにそう言って微笑んだ。

「おぎゃあ（それにしても、あの謎の仮面の男は一体何者何だろ？原作ならあの場所に居るのはマダラの筈……それなのに。）」

そんな事を考えて居たら眠くなってシズナは眠った。

「今は、安らかにお眠り。」

第三章（前書き）

またまた連続更新です。

第三章

寝て居たら、騒がしくなつて来て目を開けると九尾が母：クシナの封印術の鎖が巻付いて居た。

「すぐに、結界を貼らないと。」

「私は、大丈夫よミナト。」

「ゲホッゲホッ。」

「クシナ。」

「おぎゃあ。（此処に私が居るといふ事は私の中に九尾を封印するみたいだね、まあルナに封印されるよりましだなあ！！）」

「起こしちゃたわね。」

「ごめんねえ、シズナ。」

「おぎゃあ。（別に、私は気にして居ないよ。）」

シズナは、気にして居ないよとそう言いたい見たいにミナトとクシナに微笑んだ。

「クシナ。」

「私が、このまま蒼月を引きずりこんで死ぬわ。そうすればシズナが蒼月に会った時蒼月にかかって居る特殊な幻術も解けて居る筈だ

から残り少いチャクラを貴方達を助けるにはそれしかないの今までありがとう。」

「クシナ……君が僕を四代目火影にしてくれた！そして君の旦那になれたそしてシズナ・此処には居ないルナの父親になれた！！それなのに……………」

「おぎゃあ……………お父さん。」

「ミナトそんな顔しないで、私は嬉しいの貴方に愛された事それに今日はシズナ・ルナの誕生日よ。それにもし私や貴方が生きてシズナやルナの四人で暮らせて居たらどんなに幸せかは想像出来ないけどただ心残りは、シズナとルナの成長が見れない事ねえ。」

「おぎゃあ（大丈夫だよお母さん・お父さんいつか私とルナの成長が見れるよ。）」

「クシナ……君が死ぬ事は無いそのチャクラはシズナと再会為る時に使うんだ。」

「え。」

「君の残り少いチャクラを、八卦封印でシズナに封印する。それと蒼月には悪いけど僕が道連れにする人柱力じゃない僕だから出来る封印術屍鬼封尽だね。」

「でも、屍鬼封尽は……………」

「それにもう一つ、蒼月には悪いけど僕に蒼月の力を半分封印する。それに、これだけの力を封印するのは物理的に封印しきれないし戦

略的にも無理だ。それに君が蒼月を封印したら人柱力が不在で尾獸バランスが崩れてしまうだから僕が屍鬼封尽で蒼月の力を半分封印を永久的に封印するそして、蒼月の力の半분을シズナに封印するそう八卦封印だね。それに君が言いたい事は分かるでも自来也先生が言って居た……世界の变革の事それに伴って起きる災いについてそして今日確信した事が二つある。あの烏見たいな仮面の男は再び災いを起こすだろうそしてそれを防ぐ事が出来るのはシズナだとそう信じて居る。」

「…………でも…………ミナト。」

「おぎゃあ（大丈夫だよお母さん。）」

「この子を信じよう何たて僕と君の子供何だから。」

「分かったわ。」

「それじゃあ、封印するよ四象封印。」

「…………これで、封印は終わった。」

「グッ、…………そうね。」

「…………シズナ、こんな親でごめんね。」

「君には、辛い思いをさせてしまうけど…………。」

「…………、ルナの事よろしくね。」

「…………最後に、君が産まれて僕とクシナは嬉しかったよ。」

ミナトは、そう言ってシズナに微笑んで死んでしまった。

そして……

「……ミナトは、もう行ってしまったのね。」

「おぎゃあ（……………お母さん。）」

「グッ、…………シズナミナトも言ったけどルナの事よろしくね。」

そう言って、クシナも死んでしまった。

「おぎゃあ（お母さん・お父さん私頑張るよ。）」

シズナは、そう心に言い聞かせて眠りに付いた。

第三章（後書き）

次の話から、幼少時代から里を出て行く話までを書きます。

第四章（前書き）

更新です。

第四章

「ミナト・クシナお主らうずまき一族に伝わる秘術を使うとは……。」

と言う声で目が覚めた。

目を開けて声の主の方に顔を覗き込んだらそこには三代目が居た。

三代目は、しばらくミナト・クシナの遺体を見て私を抱き上げてルナが居る家に向かった。

「おお、ルナはクシナ似だな……シズナはミナト似だが……お主らはこのじいじいが幸せにして見せるからのう。」

三代目は、そう言ってご意見番の二人が居る場所に向かった。

私は、ルナを見習って寝る事にした。

シズナ視点終了

火影視点

「ならぬと言ったならぬ。」

「だが、猿飛よ四代目の血筋を受け継いで居る二人をしかも九尾を封印されて居るシズナとルナを一緒に出来ぬ。」

「しかし……。」

「なら、言うが九尾を封印されて居るシズナとルナを一緒にして万が一に九尾が出て来てルナを傷つけたらどうするだからシズナはお主に預けてルナは四代目と親友の日向に預ける事にする。」

「……………分かった。」

ご意見番の二人はルナを連れて火影執務室から出て居た。

「すまぬ、ミナト・クシナ……儂が不甲斐ないばかりにすまぬ……。」

火影視点終了

第四章（後書き）

次から、幼少編です！！

第五章（前書き）

妹ルナとの会話を書きました。

後、前の二つは消しました。

第五章

私が、ルナと引き離されて火影屋敷に過ごすようになって3年の月日が経った。

私は、1〜2歳の間で暗部や世話係りや爺ちゃんにバレない様に壁上りの修業や神様から貰った私だけが使える写輪眼・万華鏡写輪眼・白眼・直死の魔眼を合わせた目を使える様に練習してこの目の名前を紅月眼と呼ぶ事にした。（理由は、紅くて瞳の真ん中に三日月見たいな形状をした物が出来て居る為。）

そして今日は、九尾事件の追悼式の日だった。

けど、私は火影屋敷に居た何故かて追悼式に何か行つて里人に暴力を振るわれるからだよ。

だから爺ちゃんに、帰り初めてルナに会いたいと言い爺ちゃんは追悼式が終わつたら連れて来ると行ってくれた。

それから、4時間後追悼式は終わり火影屋敷に向かって来る爺ちゃんとルナの気配がして二人を待つたためソファに座つて居た。

ガツチャ

「シズナよ、帰つて来たぞ。」

「爺ちゃん、お帰り!!」

「ただいま、シズナ。おおそうだったそうだったそなたの妹のルナ

を連れて来たぞルナ入ってお出で。」

ガツチャ

外で、待つて居たルナは爺ちゃんに呼ばれて部屋の中に入った。

「失礼します。」

「ルナよ、こやつがそなたの兄のシズナだ。」

「初めまして、我が妹ルナ私がそなたの兄うずまきシズナだ。」

「えーと、初めましてシズナ兄様私は波風ルナと言います。」

シズナは、思ったやつぱりなルナだけ波風の名字にしたのは自分と兄妹じゃないとバレない様にする為だと言う事に気付いた。

「あの、シズナ兄様。」

「どうした、ルナ。」

「何故、兄様と私は名字が違うのですか。」

まあ、ルナの質問は当たり前だなあ。

「その事は、里の重要に関わるからな私から言えないなあ。」

「そうですか。」

まあ、そんなこんなでルナと一杯遊んで日向の人がルナを迎えに来

てルナは帰って居た。

「はぁ（さて、そろそろヒナタが誘拐されるからヒナタを助けたら影分身に任せて私は里を出て私見たいに人柱力や血継限界を持つて虐げられた奴等を助けて一緒に自分達の里を作りますか。後、暁が味方かも調べないとなぁ！！）」

シズナは、そう考えて居た。

第五章（後書き）

次は、ヒナタ誘拐事件です。

ヒナタを助けてシズナは、里を抜けます！！

第六章（前書き）

ヒナタ誘拐と里抜け話です。

第六章

私は、この一週間の間に里を出る準備を着々としていた。

準備も終えて今は、爺ちゃんとルナに手紙を書いた。

「さて、そろそろ行きますか。」

シズナは、色々な物を入れたリュックを背負い誰にもバレない様に瞬身で里外れまで行きヒナタを誘拐する雲隠れの忍を待つて居た。

三十分後、ようやくヒナタを抱えて来た雲隠れの忍が来た。シズナは一瞬で雲隠れの忍の首を跳ねてヒナタを抱き木の根元に寝かせて影分身を暗部時の蘭月にさせてヒナタをおんぶさせて爺ちゃんとルナに渡す手紙も持たせて木の葉に向かわせシズナは、そこを後にした。

第六章（後書き）

次は、少し番外編の話です。

番外編（前書き）

シズナが、三代目と妹ルナに宛てた手紙の話です。

番外編

爺ちゃん・ルナへ

爺ちゃん・ルナ、私は旅に出る為里を抜けます。

何故、私が里を抜けてまで旅に出るかは産まれた時に自我が目覚めて居ました。後爺ちゃんなら分かると思いますが九尾事件はある男即ちこの男が首謀者であると確信しました。それにこの男は先代の人柱力である母さんが九尾（蒼月）が入って居る事を首謀者は気付いて居ました。それにその首謀者は人柱力が子供を産む時に封印が弱まる事をして居てそれを狙ったか見たいに秘密の場所で私とルナを産んだ場所にそいつは現れました。

私は、その男が何の為に木の葉を襲ったかは分からないけどその男はいつか私は狙われると思うから私は木の葉から出る事にしたのです！！

それとその男の、目的を探る為もあります。

ルナ、こんな私が兄ですまない。

だが私は、いつか絶対にお前に会いに来るよその時はどんな事になつてるか分からないけど私がお前に会いに行く時まで強くなつていなさい。

これで、手紙は終わりますが私の事は探さないで下さい。

色々長く書いたが、爺ちゃん・ルナまた会おう。

シズナより

手紙の最後にこう書かれて居た。

なお、この手紙は証拠湮滅のため10秒後に燃えます!!

番外編（後書き）

次は、オリジナル里を作って全人柱力と血継限界（オリキャラ含み）を探して一緒にオリジナル里に暮らします。

第七章（前書き）

雨隠れに来ました。

第七章

シズナが、木の葉を抜けて三日が経った。

シズナは、今晝を探して居た。

それは何故か？

「（うちはマダラに、聞きたい事があるしもしかしたら仲間になって貰えるかも知れない……。）」

と、シズナは思っ居るからだ。

シズナは、ペイン（長門）が居るだろう雨隠れの里に向かった。

二日後、シズナは雨隠れに到着した。

「（此処が、雨隠れの里かあ。）」

シズナは、原作通り雨が降って居るなと思って居た。

「（さて、小南さんとペインは私が雨隠れに入っただからこちらに来るかなあ？）」

シズナが、そんな事を思っ居たその時……

ヒラヒラ

白い紙の大群がシズナの前に舞い降りた。

「（早速、来ましたね。）」

「貴方、九尾の人柱力よねえ。」

「ええ、初めまして小南さん私はうずまきシズナです。」

「何しに、雨隠れに来たの。」

「実は、マダラさんに会いに来たのですが居ますか？」

「マダラは、今居ないわ。今ある組織の監視をゼツと一緒に居る最中だから。」

「あの、ある組織でもしかして私が産まれた時に襲撃して来た烏見たいな仮面を付けた奴が関わって居るんですか。」

「何故、それをしている訳。」

「実は、私産まれた時に自我が目覚めて居てそいつに殺され掛けたので……。」

「そう、分かったわ。ペインの所に行きましょう。」

「良いんですか、知らない私がペインの所に来て。」

「貴方、マダラとペインに会いに来たのでしょうか。」

「……はい。」

「なら、良いじゃない。」

「分かりました。」

「それから、敬語は止めてタメ口でいいわ。」

「いいえ、これは癖ですから気にしないで下さい。」

「そう、分かったわペインの所に向かいましょう。」

シズナは、小南に着いて行った。

第七章（後書き）

次の話で、ペインとマダラと会話します。

第八章（前書き）

久し振りの更新です。

第八章

シズナは、小南に付いて行きペインが居る所に着いた。

そこには、任務から帰って来たマダラがペインと話をしていた。

「君は、ミナト君とクシナちゃんの息子だよね何故君が此处に居るんだい。」

マダラは、シズナに聞いた。

「その事で、マダラさん貴方に聞きたい事がある。」

「何だい？」

「貴方は、十尾を復活させよとはして居ないのかあ。」

「！？ああ、俺は十尾を復活させよ何て考えて居ない。確かに昔柱間と戦い負けた時俺は十尾を復活させてこの世を自分の物にしようとしたが君の父親のミナト君と母親のクシナちゃんに会ってねその時に説得させられてねそれからは考えて居ないよ。」

「そうですか、父と母が……。」

「それより、何故え」と……。」

「ああ、私の名前はシズナです。」

「シズナ君は、何で俺とペインに会いに来たんだい。」

「実は、私小南さんにも言いましたがあの事件の時自我が目覚めて居たと言うより私は一度死んで神様にチート能力を貰い転生したらあの事件の首謀者を産まれた時に見ました。」

シズナの言った言葉に、マダラとペインと小南は驚いた。

「君は、奴を見たんだよね。」

「はい、烏見たいな仮面を付けて居て黒が交ざった水色の髪をしたアイツが母の中に居た蒼月を無理矢理母の中から出して暴走させたんです。」

「まさか、奴がまだ生きて居たとは……。」

「あの事件の首謀者を知って居るんですか。」

「ああ、奴は俺と柱間と同じく戦国時代からのライバルの水黒双刻で奴が作った組織名は董で今ははつきりと詳細は分かって居ない。」

「そうですか、私の考えではやっぱりその水黒双刻は十尾を復活させようと動くと思います。」

「確かに、奴は必ず動くだろうそれが何時になるかは分からないがね。」

「実は、私貴方達と会った後自分と同じ人柱力を何名か仲間にしようつと考えて居るんです。」

「そうか、ならもし仲間が出来たらまた此処に来れば良いその時は

他の仲間も居るだろなペイン。」

「ああ、何時でも仲間を連れて来い歓迎する。」

「そうですか、ありがとうございます。」

それから、シズナは仲間を作りに行こうとしたがマダラに今日はもう遅いと言われて小南に空き部屋に案内させて貰い此処に泊まる事にした。

第八章（後書き）

次は、いよいよ中忍試験の話です。

第九章（前書き）

久し振りの更新です。

第九章

シズナが、木の葉を抜けてあれから9年が経った。

そして、木の葉の入口の障壁と門にある7人の子供と大人が居た。

「久し振りだな、まさか中忍試験で来るとは思っても居なかったよ。」

「そうですね。」

「……そうだな。」

「僕は、初めてですからシズナ何か美味しい食べ物があるなら教えて下さい。」

「確かに、アタシもお腹空いた。」

「そうだが、早く何か食いたいぜえ。」

「確かに、お腹空いたな、俺はお前達の中忍試験の志願書を受付に出して来るから昼ご飯を食べたら各自宿泊場に来るように。」

上からの声の順番は、シズナ・白・我愛羅・君麻呂・多由也そしてシズナと同じでNARUTOの世界に転生した親友のキンミヤ・ヒジリに変化の術で変装して6人の担当上忍をしているペイン事弥彦の順だった。

「分かりました、弥彦先生。」

「なら、木の葉名物ラーメン屋一楽に食べに行きましょう。」

「一楽か、分かった皆もそれで良いか？」

「『『『何でも、良いから早く食べに行こう／行きましよう／行くよ／行こうぜえ。』』』」

「分かった、では弥彦先生また。」

そして、シズナ達は弥彦と別れ一楽に向かった。

ラーメン屋一楽の前

「早く、入ろうぜ。」

「アンタは、もう少し静かに出来ないの？」

「多由也の言う通りだヒジリ君はもう少し静かにしなさい。」

「五月蠅いな、何でお前達はそんなにグチグチ言っかな。」

「ヒジリ、君麻呂と多由也の言う通りお前は落着きが無いのは皆や弥彦先生達も知って居る事だ諦める。」

「そんな、シズナお前も君麻呂と多由也見たいに説教するなよ。」

「ほお、君はそんなに私とO H A N A S I がしたいのかい？（黒笑）」

「すいませんでした。」

ヒジリは、シズナに向かって土下座をした

「とにかく、ヒジリも謝ったし早く中に入りました。」

「……そうだな／ですね。」「……」

白がそう言いシズナ達は一樂の中に入った。

「ありがとうございます。」

シズナ達は、腹一杯ラーメンを食べて一樂から出た。

シズナ達が、一樂でラーメンを食べて居た時ある場所では……

「皆を、呼んだのは他でも無い中忍試験に参加を表明している二つの里についてじゃ。」

「二つの里ですか？」

他の忍達の代表でカカシが、三代目に聞いた。

「そうじゃ、一つが大蛇丸が作った音隠れの里と新雨隠れの里じゃ。」

「大蛇丸が、里を作ったのは知って居ますが新雨隠れの里と言うのは？」

「新雨隠れの里は、木の葉と砂隠れに挟まれて居た土地を旧雨隠れの里と合併させて出来た里じゃ。」

「その、新雨隠れがどうしたんです。」

「その、新雨隠れの里の中忍試験を受ける子の中にシズナが居るの

じゃ。」

「「「!?!?!」」」

三代目から、出た名前を聞いたカカシ達は驚いた。

「シズナが、木の葉から消えてあれから9年が経ったそれから新雨隠れの里から同盟を組みたいと申請も来ておる。」

「同盟ですか。」

「そうじゃ。」

三代目のその呟きに「意見番のホムラとコハルが喋った。

「我々ご意見番と猿飛と上層部は、新雨隠れの里と同盟をするか検討し中忍試験後に同盟を決定する事にした。」

「もし、中忍試験中に問題があるのなら同盟の話は無しと言う事じゃ。」

「とにかくじゃ、中忍試験中は今まで以上で励む様に分かったな。」

「「「はい。」」」

カカシ達は、話も終わり部屋から出よとした時……

「カカシは、残れ。」

三代目がカカシを呼び止めカカシ以外は部屋から居なくなった。

「何か、三代目。」

「シズナが、来て居る事はルナに知らせて良いぞ。」

「ルナも、シズナに会う可能性があるからですか？」

「そうじゃ、シズナが里を抜けた理由を知っておるのはおぬしとルナと旧名家の当主とご意見番だけじゃ。」

「シズナが、産まれた時に自我が合ったのを聞いた時は驚きました。」

「それは、儼も他の皆もじゃ。」

「分かりました、とにかくルナには俺からシズナの事を連絡します。」

「頼んじゃぞ。」

カカシは、部屋から出て居た。

カカシと三代目が、シズナの話をしていた時シズナ達は………
…砂隠れの我愛羅の姉と兄とサスケとサクラと妹ルナと会って居た。

第九章（後書き）

次の話はシズナ達とルナ達の会話話です。

第十章（前書き）

更新だ
〜

第十章

ラーメン屋一樂を出た、シズナ達はそれぞれ夕方まで木の葉の観光名所を周る班とそこらへんを周る班に別けて観光名所を周る班がヒジリと我愛羅と多由也でそこらへん周る班がシズナ・君麻呂・白という事にした。

「じゃあ、ヒジリ夕方には宿泊場に遅れない様にしろよ。」

「分かった。」

そして、それぞれ行動を開始した。

「シズナ、これから何処に行きます。」

「そうですね、シズナさん何処に行きます。」

と、君麻呂と白がシズナに聞いて来た。

「そつだな……………」

シズナが、何処に行こうかと考えて居た時……

「木ノ葉丸！！」

「「「！？」」」

誰かの、声が聞こえたシズナ達は声が聞こえた場所に気配を消して向かった。

声が聞こえた場所に付いたシズナ達は気配を消して声の主を見た。

「あの子は……………」

シズナは、自分と同じ金色の長い髪で女の子を見て驚き声を小声を出したのを君麻呂と白に聞こえて居た。

「「シズナノさん、あの金色の髪の子がどうかしたんですか？」」

君麻呂と白が、シズナに聞いて来た。

「ああ、あの金色の長い髪の女の子は3歳の時に一回会った後別れた私の妹だ。」

それを、聞いた君麻呂と白は……

「マジですか／かよ？」

「マジだ。」

シズナは、そう言いまたルナ達を見た。

「ちょっと黒頭巾、木ノ葉丸を離せ。」

「ちょっと、ルナ。」

「ルナ姉ちゃん、助けてコレ。」

「五月蠅い、餓鬼じゃん。」

「いい加減に、木ノ葉丸を離して。」

ルナは、カンクロウに向かって居たが………

「キャアア。」

ズッ

「何だ、弱いじゃん木の葉の下忍つてのはよおお！」

「？（何今の…）」

「（こ…、こいつらって国外の………何でこんなところに。）」

「とまあ、飽きたからこのドチビをボコボコにした後次はその五月蠅いチビね。」

「ルナ姉ちゃん!!」

「木ノ葉丸。」

ルナは、またカンクロウに向かおうとした時

ガッ

「くっ……。」

「よそんちの里で何やってんだてめーは。」

カンクロウに石を投げたのは、ルナの班の仲間たちはサスケだった。

「あれは、イタチさんの弟では?」

「ああ、イタチの弟だ。」

「ふうん、あれがイタチ先生の弟か。」

「クッ…ム力つくガキがもう一人…。」

「失せる。」

「キヤーー、カッコいい!!」

「おい…、ガキ降りてこいよ俺はお前みたいに利口ぶったガキが一番嫌いなんだよ。」

シュ

「おい、カラスまで使う気かよカンクロウ。」

「さて、二人共あの子達を助けるよ。」

「「分かった／分かりました。」」

シズナは、カンクロウの持つて居たカラスを君麻呂はテマリが持つて居た大きな扇子を一瞬で盗みカンクロウとテマリの後に現れ白はルナ達の前に現われた。

「はいはい、こんな所で暴れない様にね砂の忍さん。」

「「な、いつの間に。」」

「君が、この絡繰り人形を出した時からだよ。」

「チツ。」

「ちょっと、良いかしら…。」

「何だい？」

「額当てから見てあなた達砂隠れの里と新雨隠れの里の忍者よね…確かに砂隠れの里は同盟国ではあるけれど…その新雨隠れの里は同盟国ではない筈目的を言いなさい場合によってはあなた達をこの

まま行かせるわけにはいかないわ…。」

「私達は、今回木の葉で行なわれる中忍選抜試験を受けに来たんですよ。」

「中忍選抜試験？」

「私達もその、新雨隠れの里と同じ私達砂隠れの里も中忍選抜試験を受けに来たんだよ。」

「そう言う事だから、俺達のカラスと扇子を返すじゃん。」

「はいはい、じゃあ返すね。」

シズナと君麻呂は、カンクロウとテマリにそれぞれ武器を返した。

「では、私達はこれで。」

テマリとカンクロウは瞬身で消えた。

「じゃあ、私達も宿泊場に帰りますか。」

シズナが、そう言い帰るとした時……

「おい、その金髪の女顔の奴名前何て言う。」

その場の空気が、ヒンヤリした。

「ねえ、その黒髪ツンツンヘヤーの君今私に何て言ったかなあ？」

君麻呂と白は、ヤバいと思い始めた。

「ああ、聞こえなかったか金髪の女顔と言ったんだよ。」

「ハッハッ、そんなに死にたいかあ？」

シズナは、サスケだけに殺気を浴びせた。

「ッ、おえー。」

サスケは、シズナの殺気を浴びて一瞬自分が死ぬイメージをして嘔吐した……。

「さ、サスケ君大丈夫。」

「おい、黒髪糞野郎人に言って良い言葉と悪い言葉が在るんだから気を付けろよ。」

シズナは、そう言い君麻呂と白の方を向いた。

「君麻呂・白、そろそろ時間だ。」

「そ、そうですね。」

「ああ、じゃあ帰るか。」

君麻呂と白は、そう言いシズナと瞬身で宿泊場に向かった。

オマケ

あの後、サスケはサクラとルナに介護されて居たのを見た某影を使う一族の嫡子が介護されて居るサスケに飛びざ蹴りを食らわしてルナに怒られて土下座をして居たとかして居なかったとかと里中に噂が流れた。

第十章（後書き）

次は、いよいよ中忍選抜試験第一試験の話を更新します。

第十一章（前書き）

久しぶりの更新です。

第十一章

シズナと白と君麻呂が、ルナ達とカンクロウ達と会って一週間後中忍選抜試験の当日の日になった。

シズナ達とヒジリ達は、中忍選抜試験の会場に朝早くから来て居て試験が行われる教室で色々話をして居たら中忍選抜試験を受けに来た受験生がゾロゾロと入って来た。

それから、三十分後やっとルナ達が来た。

「おい、シズナあれがお前の妹か？」

と、ヒジリがシズナに聞いて来た。

「ああ、そうだ。」

「じゃあ、隣りに居る男は……。」

「ああ、イタチさんの弟だ。」

「へえ、やっぱり何となく似て居るからさあ。」

「まあ、兄弟だしなあ。」

ヒジリは、そう解釈した時……

「うーん？」

「どうしました、シズナさん。」

「何か、音隠れの忍がコソコソしているからさあ。」

「ああ、なるほどね。」

「まあ、大丈夫だろ。」

結局音隠れの忍達は、原作通りカブトに超音波攻撃を食らって嗚咽しサクラとルナに心配されて居たその時……

「静かにしやがれどぐされヤロー共が!!」

「やっと来たよ、試験官。」

シズナは、小さく呟いた。

「待たせたな…」「中忍選抜第一の試験」試験官の森乃イビキだ…。音隠れのお前ら！試験前に好き勝手やってんじゃねーぞコラいきなり失格にされてーのか。」

「すみませんねえ…なんせ、初めての受験で舞い上がってまして…つい…。」

「まあ、良い席に座れこれから中忍選抜第一試験を始める。」

中忍選抜第一試験が、始まった。

第十一章（後書き）

次も、第一試験の話です。

第十二章（前書き）

すいません、更新遅れました。

第十二章

中忍選抜第一試験が、開始しシズナ達は一斉に試験用の解答用紙に答えを書いて居た。

「（案外簡単ですね。）」

シズナは、心の中でそう思っ居た。

そんな、シズナを見て居る子が居た！！

シズナの妹、ルナだ。

ルナは、カカシから試験開始二日前に志願書を貰った後帰るとした時カカシに呼び止められた。

「ルナは、ちょっと残って話がある。」

カカシが、そう言っサクラとサスケは帰っ居た。

「カカシ先生、話シズナ兄様の事ですか？」

「！？ああ、そうだ。その様子からシズナに会っただな。」

「はい、一昨日に。」

ルナは、敢えてサスケが兄シズナに女顔と言っサスケだけに殺気を送った事を言わなかった。

「そうか、シズナに会ったなら中忍試験で会うかもな。」

「そうですか、火影の祖父さまもシズナ兄様の事知って居るんですよね。」

「ああ、とにかくお前は中忍試験で受かる事だけ考えている。大丈夫シズナも中忍試験が終わったらお前に話し掛けてくれる筈だからね。」

「分かりました。」

そして、ルナは力カシと別れて帰って居た。

「（力カシ先生も、言っていましたしシズナ兄様が話し掛けてくれるまで今やるべきの事をしなきゃ。）」

ルナは、解答用紙にまた向かって答えを書き始めた。

何とか、中忍選抜試験第一試験は終り第二試験の試験官アンコが窓から侵入して来て第二試験が行なわれる第二試験会場の死の森に向かった。

そして、第二試験が始まる。

第十二章（後書き）

次は、第二試験の話です。

第十三章（前書き）

後書きに、お知らせを書いて居ます。

第十三章

シズナ達、第一試験通過者は第二試験試験官のアンコに付いて行き第二試験会場の死の森に着いた。

「ここが、〃死の森〃と呼ばれる所以すぐ実感する事になるわ。」

アンコが、そう言つと……

「へえ、此処が死の森ですか以外に異質な空気が流れていますね。」

「そう、君はそう感じるだね。」

アンコは、一瞬でシズナに向かってクナイを投げた。

「アンタみたいな子が真つ先に死ぬのよねエフフフ……」

アンコは、瞬身の術でシズナの後に現れ先程投げたクナイで頬に掠った場所を舐めた。

「私の好きな赤い血ぶちまいてね。」

「フフ、それは残念ですねそれは私の影分身ですよ。」

「あんだ、いつの間に。」

アンコの後には、捕まっていた筈のシズナがアンコより早い瞬身の術で手を組んで後に居た。

「ああ、それとこれ。」

「これは？」

「先程投げたクナイは、使い物なら無そうなので私が作った切れ味抜群のクナイをさしあげますよ。」

「そう、ありがとうでもね私の後ろに立たないで早死にしくなればね…。」

「ご忠告ありがとうございます。」

シズナは、白と君麻呂達の所に戻って居た。

「どうやら、今回は血の気の多い奴が集まったみたいね…フフ…楽しみだわ…それじゃ第二の試験を始める前にアンタらにこれを配っておくね！」

「「？／！」」

「同意書よ、これにサインをしてもらうわ。」

「何で、ですか？」

「…こつから先に死人も出るからそれについて同意をとつとかないとね！私の責任になっちゃうからね…。」

「「「（それで、良いのか／よ。）」「」」

と、シズナ達以外の受験生は心でつこんだ。

「まず、第二の試験の説明をするからその説明後にこれにサインして班ごとに後ろの小屋に行って提出してね。じゃ！第二の試験の説明を始めるわ早い話ここでは極限のサバイバルに挑んで貰うわ。まず、この演習場の地形から順を追って説明するわこの第44演習場はカギのかかった44個のゲート入口に円状に囲まれてて川と森…中央には塔があるその塔からゲートまでは約10km…この限られた地域内であるサバイバルプログラムをこなして貰うその内容は…各々の武具や忍術を駆使した…なんでもアリアリの「巻物争奪戦」よ！！」

「巻物？」

「そう、「天の書」と「地の書」…この二つの巻物をめぐって闘うここにはつまり26チームが存在するその半分13チームには「天の書」もう13チームには「地の書」をそれぞれ1チームひと巻ずつ渡すそしてこの試験の合格条件は…天地両方の書を持って中央の塔まで3人で来ること。」

「つまり巻物を取られた13チーム半分が確実に落ちるってことね…。」

サクラは、アニコに聞いた。

「ただし、時間内にねこの第二試験期限は120時間ちよと5日間やるわ！」

「5日間！！」

「ご飯は、どーすんのオ！？」

「自給自足よ！森は野生の宝庫ただし人喰い猛獣や毒虫・毒草には気を付けてそれに13チーム39人が合格何てまず、ありえないからなんせ行動距離は日を追うごとに長くなり…回復に充てる時間は逆に短くなってゆくおまけに辺りは、敵だらけつかつに寝る事もままならないつまり巻物争奪で負傷する者だけじゃなく…コースプログラムの厳しさに耐えきれず死ぬ者も必ず出る続いて失格条件について話すわよ！まず、1つ目時間以内天地の巻物を塔まで3人で持つてこれなかったチーム2つ目班員を失ったチーム又は、再起不能者を出したチームルールとして…途中のギブアップは一切無し5日間森の中！そして…もう一つ…巻物の中身は塔の中にたどり着くまで決して見ぬこと！」

ルナはアンコに聞いた。

「もし、途中で見てしまったらどうなるんですか？」

「それは見た奴のお楽しみ。」

「？」

「中忍ともなれば超極秘文書を扱うことも出てくるわ信頼性を見る為よ。説明は以上同意書3枚と巻物を交換するから…その後ゲート入口を決めて一斉スタートよ！最後にアドバイスを一言死ぬな！」

シズナ達、受験生は巻物を受け取りバラバラにゲートに向かった。

「これより、中忍選抜第二試験！開始！！」

第二試験が、開始した！！

第十三章（後書き）

ワンピース小説でも書きましたがクリスマス企画で、ワンピースの主人公のシズナとナルトの主人公のシズナと作者多摩による談話をする事にしました。

楽しみに待つて居て下さい！！

クリスマス企画対談話（前書き）

お待たせしました、クリスマス企画対談話です。

クリスマス企画対談話

？

？

クリスマス企画

「こんにちは、作者多摩です。今回はクリスマスという事で私と私
が書いて居る小説の主人公二人に来て貰いました。では登場して貰
いましょうどうぞ。」

「どうも。」

「こんにちは！！」

「今回の、クリスマス企画対談でONE PIECE 転生最強小説
の主人公モンキー・D・シズナさんともしも、あの時ワンピースの
世界じゃなくNARUTOの世界で主人公のナルトに成り代わった
らのうずまきシズナさんお二人に来て貰いました。」

「初めまして、紹介にもありましたモンキー・D・シズナです。」

「こちらこそ、初めましてうずまきシズナです。」

「今回、お二人に来て貰ったのは今日がクリスマスなので私作者多
摩とお二人と対談企画をする事にしました。」

「対談をするのは、良いけど何を話すですか？」

「それに付いては、考えていますから大丈夫です。」

「それなら、良いけど……。」

「それでは、お二人に質問です。恋人は居ますか？」

「居ますよ、私の場合とっても可愛い恋人が居ます。」

「私も、居ますよとっても恥ずかしがりあさんで女帝で七武海をしていますよ。」

「ちよつと、そこ何ネタバレ見たいな事言つて居るんですか。」

「多摩が、恋人が居ますかて言うから言つたまでですが？」

「ハア、分かりましたよ。（この天然野郎が……）じゃあ、次の質問今最も誰と戦いたいですか？」

「うゝんそうだな、私は父・四代目火影と自来也さんと水黒双刻と戦いたいですね。」

「私は、赤髪のシャンクスと冥王と白髭と黒髭と爺ちゃんだな。」

「そうですか、そんなお二人から大物の名前が聞けて嬉しいのです。では次の質問兄弟は居ますか？」

「居るよ、とっても可愛くて自分の忍道を信じて仲間思いな妹が居ますよちよつとブラコンな所がたまに傷ですけど。」

「私も、居ますよ笑顔が似合つて太陽見たいで仲間思いで天然で可愛い妹と常識人の義弟と誰よりも優しく頑固な一面がある義弟が居るよ。」

「そうですか、では次の質問貴方達の夢は何ですか？」

「私の、夢はグランドラインの海を仲間達と渡り着る事と妹の夢である海賊王にする事だな。」

「私の場合は、忍世界の平和と恋人と結婚して子供と孫に囲まれて幸せに暮らす事と妹に本来の主人公ナルトの夢である火影になって貰う事だな。」

「では、そろそろ御開きの時間が着そうなので最後の質問です。転生して良かったですか？」

「そうですね、確かに航海は危険と隣り合わせだけど仲間が出来たりまた強者と戦う事があるから私は転生して良かったと思って居るよ。」

「私は、そうですね最初は何で自分だけこんな思いをしないと行けないのかと思いましたけど里を抜けて色んな人や師匠達と出会い最愛の人や同じく転生した親友や仲間達のお陰で今は転生して良かったと心からそう思えるよ。」

「そうですか、今回は忙しい中来て貰いありがとうございます。」

「いえ、こちらこそ読んで貰いありがとうございます。」

「そうですよ、私はもう一人の自分と会話が出来て嬉しかったからです。」

「そう言われると嬉しいです。これから頑張って2作品を頑張っ

て完結出来る様に頑張っ
て行きたいと思ひます。こ
れからも応援よろしくお願
ひします！」

クリスマス企画対談話（後書き）

シズナが、シヨタ丸君（笑い）から妹ルナ達を助ける話です。

第十四章（前書き）

明けましておめでとございます。今年もこの駄目作者多摩の小説を読んで貰えるよ頑張って行きますのでどうかよろしく願いします。

では、第十四章始まります！！

第十四章

中忍選抜第二試験が始まった。

ゲートに向かってシズナ・君麻呂・白は……

『君麻呂・白、私はこれからルナの所に向いますので巻物をお願いしますね。』

「分かりました。」

「分かった。」

『では、行つて来ます。』

シズナは、ルナ達の所に向かった。

その頃、ルナ達は……。

「悪いわね、サスケ……合言葉は………忘れちゃた。」

「良いわよ、ルナ！イケてる！！」

「ルナ！カッコつけて助けに来たつもりだろーが……出しゃばるな！逃げる！！こいつは、次元が違いすぎる。」

「フフ……あの蛇を見事倒して来たようねルナちゃん。」

「！（この人どう見てもヘビ見たいな姿しているけど……そうか……あの人のしわざだったのか……）」

「（あいつが助けに来て……場が良くなった事は在るが今はそれどころじゃねえ。）」

「やいやいやい、貴方弱い者イジメやつちゃてくれたみたいね。」

「（マズい……このままじゃ3人ともやられる………これしか、方法はない……。）」

「！」

「（……写輪眼を……。）」

「巻物ならお前にやる……頼む……これを持って引いてくれ。」

「！！（はぁ！？）」

「え？」

「サスケ……何トチくるってんですか貴方は！？巻物敵にやってど

「するんですか。」

「なるほど…本能がいい…『獲物』が『捕食者』に期待できるのは他のエサで自分自身を見逃してもらっただけですものね…。」

「受け取れ！」

「！！！」

パシィ

「！！！」

「ルナてめえよけーなことをするな！この状況が分かってるのか！！」

ドカ

「え！？」

「てめー、急に何しやがる。」

「ルナ…あんた何を……………」

「私は、合言葉は忘れちゃて…………確かめようはないけど…………貴方はサスケの偽者です。」

「何を……………」

「このウストラトンカチが…………オレは本物だ……………」

「……ウソツキ…こんなばかで腰抜け馬鹿野郎は絶対、私が知って居るサスケじゃないです。この人がどのくらい強いかは知りませんが巻物渡して私達を見逃してくれる保証が何処にあるんです。ビビって状況分かって無いのはサスケ貴方の方です。」

「フッフ、ルナちゃん…正解よ。」

「？」

「巻物何て、殺して奪えばいいんだからね……！」

「ふざけんな……！」

「よせ……！逃げるルナ！」

「（ちくしょう……！見損ないましたよサスケ……！）」

「“口寄せの術”」

「……！」

ドカ

「「ルナア……！」」

シュツ

『危なかったですよ、ルナ。』

「シズナお兄ちゃん。」

ルナは、自分を助けに来てくれたシズナを見て安堵し気を失った。

『はあ、まだ危機を乗り切っていないのに気絶をしないで欲しいんですけどね。』

シズナは、ルナをサスケ・サクラの所に連れて居た。

「「ルナ!!」」

『大丈夫、気を失っただけだから。』

「あの、貴方はこの前の……。」

『まあ、その話は後でね？今はあの変態シヨタ丸君を何とかしないといけないからね。』

シズナは、大蛇丸を見てサクラとサスケに言った。

「何とかするって、アイツは次元が違っただぞ勝てる訳が無い!!」

『まあ、君達にはまだアイツには勝てないかも知れないけど私からしたら余裕で勝てるよ。』

シズナは、そう言い愛刀黒蘭を持って大蛇丸に向かって居た。

大蛇丸も、口から愛刀草薙の剣を出した。

「フッフ、貴方何者かしら。」

『変態シヨタ野郎に教えませんよ。』

シズナは、紅月眼を発動して紅月眼の能力の一つ直死の魔眼の力で大蛇丸の愛刀草薙の剣を半分にした。

「なっ！？貴方私の愛刀草薙の剣に何をしたの。」

『何で、変態シヨタ丸君に教えないといけない訳？』

「チツ、分が悪いわね此処は引かせて貰うわ。」

大蛇丸は、そう言い消えた。

『さて、ルナの所に向いますか。』

シズナは、ルナ達の所に戻った。

「あの人大丈夫かしら……。」

「大丈夫だろう。」

『私の事、心配してくれたんですね。』

「「？ッ！」」

『ああ、びっくりさせちゃたね。』

「あの、大丈夫だったですか？」

サクラが、シズナに聞いた。

『ああうん、大丈夫だよ。』

「おい、あんた何故俺達を助けた。」

『その事は、此処から離れてから話すよ。』

ルナの看病も、しないといけなからねとシズナがサスケに言った。

「……分かった。」

サスケが、そう言いシズナ達はその場を後にした。

第十四章（後書き）

今回は、何故シズナがルナ達を助けたかを書きます。

それでは、また次回楽しみに待つて居て下さい！！

第十五章（前書き）

久し振りの更新です。

第十五章

、サクラとサスケはシズナと一緒に（ルナはシズナが背負って居ます。）シズナの仲間が居る場所に向かって居た。

「まだ、着かないのか。」

『もう少しだから。』

シズナは、そう言いまた前を向き白と君麻呂とヒジリと多由也と我愛羅が待つ場所に急いだ。

それから、三十分後白達が待つて居る場所に着いた。

『着いたから、下に降りるよ。』

シズナがそう言いサクラとサスケは下に降りた。

『やあ、皆巻物は集まった？』

「「「「「シズナ！？」」「」「」」

シズナを、見た皆はシズナの所に集まった。

「シズナさん、大丈夫ですか？」

『ああ、大丈夫だよ白。』

「心配したんだぜ。」

『ヒジリが、私を心配したんですか？明日は雪が降りますね。』

「……そうだな／ですネ。」「……」

四人は、シズナの言葉に頷き納得した。

「マジで、納得するな！！」

ヒジリは、シズナ達に突っ込んだ。

その時……

「あの……。」

『ああ、そう言えば何で君達を助けたかだったね。』

「はい、そうです。」

サクラは、そう言った

『まあ、サクラちゃんの場合はルナの友達だからでサスケ君の場合
はある人から頼まれたからだよ。』

「誰だ、俺を助けてくれと頼んだ奴は……。」

『君の、お兄さんうちはイタチだよ。』

「……う……そ……。」

『何、聞こえないよ。』

「嘘を吐くな!!」

サスケは、そう言いシズナに突っ込んで来た。

「サスケ君!？」

『ああ、やっぱりこうなったか。』

シズナは、そう呟き目を紅月眼に変えてサスケに月読を食らわされシズナの精神世界に連れて来られた。

「此処は何処だ。」

『此処は、私の精神世界だよ。』

「何で、俺を連れて来た。」

『まあ、先も言ったけどイタチさんに頼まれたからだよ。』

「何で、お前はイタチを知って居る。」

『まあ、その事はイタチさんにでも聞いて下さい。私はイタチさんから君に“あの日”の真実を見せる為だよ。』

「何を、あの日の真実何てあの日アイツがやった事じゃないのか。」

『とにかく、私はイタチさんに頼まれたからいい加減にあの日の“真実”を見て貰うよ。』

シズナは、サスケにそう言い強制的に月読を発動した。

『さて、サスケがあの日の実を見終わるまで待ちますか。』

シズナは、そう言い精神世界にある本棚からNARUTOの単行本21巻を見始めた。

サスケが、シズナの精神世界であの日の「実」を見てから10分後……

『お、やっと帰って来たか。』

「……………」。

『うん、どうした。』

「……………あれは、あの日の実は本当はイタチがやって居なかったのか。」

『ああ、そうだな私もイタチさんから聞いた話だけどまさかあの日ダンゾウと大蛇丸がうちは一族が住む居住区に三代目にバレない様

に結界を張りダンゾウは根の部隊を使い大蛇丸は部下を使ってうち
は一族を殺し写輪眼を自分達の物にしようとしたが半分以上はイタ
チによって死体は目を潰されて居て使い物にもならなく結局大蛇丸
は写輪眼を諦めダンゾウは大蛇丸に頼み右腕と右目に写輪眼を移植
した。』

「……………」

『で、どうする？』

「何を……………」

『多分、この中忍試験が終わったら君はダンゾウ率いる根に殺され
る可能性がある。』

「……………」

『まあ、答えを急がなくて良いよ。君の答えが決ったら私が君が居
る場所に来て答えを聞きに来るから。』

「……………分かった。」

『なら、ルナ達の所に戻りますか。』

シズナは、サスケにそう言い月読を解除しルナ達が居る現実世界に
戻った。

「うう、此処は？」

「サスケ君！？」

「サクラかぁ。」

「良かった、サスケ君が目覚めないかと思った。」

「アイツは、ルナは無事なのか。」

「うん、ルナなら白さんが治してくれたから大丈夫だよ。」

「そうか。」

『お、目が覚めた見たいだな。』

「アンタか。」

『目が覚めたなら、私の仲間の所に来てくれ今から君達にとって大事な話があるからね。』

シズナは、そう言いサスケ達の居た場所を後にしヒジリ達の所に向かった。

「サクラ、俺達も行くぞ。」

「分かった。」

サスケとサクラは、シズナ達が居る場所に向かった。

『来た見たいだな。』

「俺達に、大事な話があるじゃないのか？」

『まあ、それもあるがその前に君達に私の仲間を紹介するよ。まず1人目は白だ。』

「こんにちは、私はうずまき白と申しますシズナの嫁です。」

『で、2人目は我愛羅だ。』

「砂漠の我愛羅だ。」

『まあ、我愛羅は無口だからあんまり気にしないでくれ。次は3人目多由也だ。』

「うちは、多由也と言うんだ。」

『多由也は、まあ男勝りな性格だ。』

「おいこらシズナ、誰が男勝りな性格だて…。」

『君がだろう？』

「ぶっ殺してやる。」

と、多由也は我愛羅と白に止められた。

『まあ、多由也の事は良いとして四人目はヒジリだ。』

「おお、君可愛いな俺と付き合わない？」

『多由也、ヒジリがサクラにナンパして居るよ。』

「ヒジリ、アンタアタシが居る見で何ナンパして居る訳。」

「おお、落ち着けよ多由也!!」

「問答無用。」

「ギャアア!!」

『まあ、ヒジリはナンパ癖があるがまあ気にしないでくれ。次は5番目君麻呂だ。』

「仲間の紹介は、分かったけど俺達にある大事な話は何だ。」

『そうだな、君達には私達が鍛えてあげる事にした。』

「え、何で鍛えるんですか？」

『そうだね、この第二試験の次が第三試験で総当たり戦の予選で他の班や隠れ里の奴等と戦うから今の内に君達を鍛える事にした訳分かったかな?』

「分かった。」

『サスケ君は、了承してくれたけどサクラちゃん君はどうする?』

「私も、鍛えて下さい!!」

『分かった、鍛えるけど時間が少ないから少ししか強く慣れないけど良いかな?』

「はい／ああ。」

『分かった、サスケはヒジリお前が鍛える。』

「分かったよ。」

『そして、サクラちゃんは多由也君が鍛えてくれ。』

「分かった。」

『そして、ルナは起き次第私が鍛えるよ。』

シズナは、そう言った。

『では、初めてくれ。』

そして、シズナ達によるサクラとサスケとルナの鍛練が始まった。

第十五章（後書き）

次は、サクラとサスケとルナの鍛練話です。

第十六章（前書き）

スランプですが、何とかネタが浮かんだので書きました。

第十六章

サスケとサクラが、シズナの仲間多由也とヒジリに修行を見て貰って居る時……

「うう、ここは？」

『起きた見たいだね、久しぶりルナ。』

「え、シズナ兄様？」

『フフ、元気そうだね。』

ルナは、起き上がりシズナのお腹を殴った

「うう、どうしてヒック私をヒック置いて居たの。」

『ごめんな、ルナお兄ちゃんお前には木の葉で幸せになつて欲しかったんだ。』

「もう良いです、私はシズナ兄様の妹だから我慢します。」

『そうか。』

「それより、サスケとサクラちゃんはどこに居るの？」

『ああ、あの二人なら私の仲間の二人と修行をして居るよ。大丈夫あの二人は強いし時間少ないけど強くナルト思っよ。』

「そうなんだ。」

『ルナ、お前も私と修行するか私が教えるが。』

「え、本当に!!」

『ああ、本当だ。だが修行するなら私はお前が妹でも厳しく行くかなそれでもいいか?』

「私は、四代目火影とシズナ兄様の子供・妹何だからそれぐらい大丈夫だよ。」

『分かったなら、早速修行をしよう。』

「うん、分かった!!」

こうして、ルナとサクラとサスケの修行が始まった!!

あれから、2日後……

『これで、君達の修行は終わりだ良く耐えたね。君達の今の力ならこの後の第三の試験を簡単に通過できるだろしかし強くなったからて相手を見下さないよにね。』

「「「分かった／分かりました。」」」

『それじゃあ、修行を耐えた君達に巻物をあげよ。』

「あなたが、持っていない巻物は何んですか？」

白が、ルナ達に聞いた。

「え」と

「天の巻物だ。」

サスケが、白にそう言った

「天の巻物ですね、はいどうぞ。」

「ありがとうございます、白姉様!」

「いえ、第三の試験お互いに頑張りましょう。」

白が、そう言いルナ達とシズナ達は目的地の中央の塔に向かった……

中央の塔前

『私達の扉はこっち見たいだし、ルナ達の扉はあそこ見たいだね。じゃあまた後で会おう……』

「分かった、また後でねシズナ兄様。」

ルナが、そう言いルナ達は隣の扉に入って居た

『じゃあ、私達も入りますか！！』

シズナが、そう言い扉に入った…

ちなみに、シズナ達が巻物を開いてその中から出て来たのは自分達の担当上忍弥彦だったのをここに追記しておこう

そして、いよいよ第三の試験が始まる！！

第十六章（後書き）

次は、いよいよ第三の試験が始まります。

第十七章（前書き）

第三の試験始まりました。

第十七章

こんにちは、うずまきシズナです。

今私達は第三の試験を受ける為に第三の試験会場に居ます。

「それでは、これから火影様より、第三の試験の説明がある各自心して聞くように。では、火影様お願いします!!」

「ふむ、これより始める、第三の試験…その説明の前にまず一つだけ…はつきりお前たちに告げておきたいことがある!!」

「？」

「!!?」

「……この試験の真の目的についてじゃ」

「!!? (……………真の目的…!?)」

「何故…同盟国同士が試験を合同で行うのか？」

「!？」

「同盟国同士の友好、忍のレベルを高めあう、その本当の意味ははき違えてもらっては困る……この試験は言わば……。」

「（言わば……?）」

「……………」

「……………」

「同盟国間の戦争の縮図なのだ。」

「!？」

「ど…どういふこと…？」

「歴史をひもとけば今の同盟国とはすなわち…かつて勢力を競い合い争い続けた隣国同士その国々が互いに無駄な戦力の潰し合いを避けるために敢えて選んだ戦いの場…それがこの中忍選抜試験のそもそもの始まりじゃ…！」

『（なる程、要するに自分達の国の力はこれぐらいですよと見に来る自他国の大名に自分達の忍が優秀ですよ依頼をするなら自分達にどうですかと感じか。）」

シズナは、そんな事を思っ居た……

「この試験が、中忍に値する忍を選抜するためのものである事に否定の余地は無い…だがその一方でこの試験は国の威信を背負った各国の忍が命懸けで戦う場であるという側面も合わせ持つ！」

「国の威信…！」

「この『第三の試験』には我ら忍に仕事の依頼をすべき諸国の大名や著名な人物が招待客として多勢招かれるそして何より各国の隠れ里を持つ大名や忍頭がお前たちの戦いを見ることになる国力の差が

歴然となれば、強国には仕事の依頼が殺到する、弱者国と見なされればその逆に依頼は減少する。」

「……………」

「…そして、それと同時に隣接各国に対し、我が里はこれだけの戦力を育て有している、という脅威つまり外交的…政治的圧力をかけることも出来る。」

「だからってなんで！命懸けで戦う必要があんだよ…！？」

「……………」

「国の力は里の力…里の力は忍の力…そして、忍の本当の力とは…命懸けの戦いの中でしか生まれてこぬ！！この試験は自国の忍という「力」を見てもらう場であり…見せつける場でもある。本当に命懸けで戦う試験だからこそ意味がありだからこそ先人たちも、目指すだけの価値がある夢」として中忍試験を戦ってきた」

「では、どうして…、友好、なんて言い回しをするんですか！？」

「だから、始めに言ったであろう！意味をはき違えてもらっては困ると命を削り戦うことで力のバランスを保ってきた慣習これこそが忍の世界の友好なのじゃ」

「……………」

「第三の試験の前に諸君に、もう一度告ぐこれはただのテストではない……………」

「これは、己の夢と里の威信を懸けた命懸けの戦いなのだ」

「……………」

「納得いきました。」

「フム…では、これより、第三の試験、の説明をしたい所なのじゃが…実はのオ…ゴホン」

「？」

「…恐れながら火影様…ここからは、審判、を仰せつかった、この月光ハヤテから…」

「……………任せよう」

「皆さん始めましてはハヤテですえー皆さんには、第三の試験、前にやってもらいたいことがあるんですね……………」

「（何だ…？この人何か体調悪そ…大丈夫かな……………」

「えー…それは本選の出場を懸けた、第三の試験、予選です……………」

「！…？、？予選…！？」

「予選って…どういうことだよ！！」

「先生…その予選って…意味がわからないんですけど…今残ってる受験生で、何で次の試験をやらないんですか？」

「えー、今回は…第一・第二の試験が甘かったせいかな…少々人数が残り過ぎてしまいましたね…中忍試験規定にのっとり予選を行い…
`第三の試験` 進出者を減らす必要があるのです」

「そ…そんな…」

「先ほど火影様のお話にもあったように、`第三の試験` にはたくさんのゲストがいらつしゃいますから…だらだらとした試合はできず時間も限られてくるんですね…えーというわけで…体調のすぐれない方…これまでの説明でやめたくなつた方今すぐ申し出て下さいこれからすぐに予選が始まりので…」

「……！！これからすぐだと……！！？」

『（五月蠅いですね、この駄犬は……）』

「えー誰もやめる人が居ないみたいなのでこれより予選を始めますね。これからの予選は一对一の個人戦つまり、実戦型式の対戦とさせていただきます」

「……………」

「えーその勝者が`第三の試験`に進出できますね。ルールは一切無しですどちらか一方が死ぬか倒れるか…あるいは、負けを認めるまで闘ってもらいますえー死にたくなければすぐ負けを認めて下さいねただし勝負がはつきりついたら私が判断した場合えーむやみに死体を増やしたくないので止めに入ったりなんかします。そしてこれから君たちの命運を握るのは…」

「開け」

「これですね…えー、この電光掲示板に…一回戦ごとに対戦者の名前を2名ずつ表示します。ではさっそくですが第一回戦の2名を発表しますね」

ハヤテが、そう言いシズナ達受験生は電光掲示板を見た……

電光掲示板には、日向ヒナタVSつずまき白と出た……

『おいおい、マジですか!!』

次回に続く!!

第十七章（後書き）

今回は、ヒナタと白の戦いです。

これから、原作と違う戦いになりますので楽しみにして下さいませ
い

バレンタインデー企画対談話（前書き）

すいません、ユフィの彼氏をフェイトから小太郎に変えたので新しく更新しました。

バレンタインデー企画対談話

「今晚、作者多摩です今日はバレンタインデーなので私が書いて居る小説の主人公の嫁さんとただ一人の女主人公の皆さんを呼びました。」

「妾は、ワンピース転生最強小説の主人公のモンキー・D・シズナの彼女のボア・ハンコックじゃ。」

「私は、〽NARUTO最強転生〽九尾の申し子の主人公のうずまきシズナさん嫁のうずまき白です。」

「私は、魔法先生ネギまTS成り代わり小説の女主人公で犬上小太郎の彼女のユフィエル・スプリングフィールドです。」

「今日皆さんを読んだのは、旦那さんや彼氏をどう思っ居るかを聴きだいたいと思ひ皆さんを呼びました。」

「なら最初は、妾からじゃの。」

「分かりました、ハンコックさんから見たシズナはどんな存在ですか？」

「そうじゃの、妾から見たシズナは優しいくて・兄妹思いや仲間思いで妾が嫉妬するぐらいに仲が良いのじゃまあ妾が一番じゃがのう。」

「そうですね、ハンコックさんありがとうございます。次は白さんあなたにとってシズナ君はどんな存在ですか？」

「私から見たシズナさんは、ハンコックさんと同じく妹のルナちゃんに優しく仲間思いで子供達から見ても頼れるお父さんで勿論僕にも優しいですよ。」

「はい、分かりました白さんありがとうございます。次はユフィエルさんどうぞ。」

「私から見た、小太郎は面白くて優しくて強くてツンデレで犬耳が可愛くてさわれるのは私だけで誰にでも優しいのが彼の良い所です。」

「そうですか、最後に小説を読んで貰って居る皆さんに一言お願いします。」

「「「これからも、私・妾・僕達の活躍を楽しみにしてして下さい。」」」

「これで、バレンタインデー企画を終わります次はホワイトデー企画で男子の皆さんに来て貰います。」

それでは、皆さんまた会いましょう!!

バレンタインデー企画対談話（後書き）

新しく書き直しました。

第十八章（前書き）

ヒナタVS白の戦い話です。

第十八章

こんにちは、中忍選抜試験の第三の試験の第一試合が自分の嫁さんの白（まだ結婚してないけど）と日向ヒナタに決まって驚いて声を出してしまっただうまきシズナです。

「では、掲示板に示された2名前へ……」

ハヤテが、そう言い白とヒナタ白前に来た

「第一開戦対戦者―うずまき白VS日向ヒナタ、両名に決定…異存ありませんね。」

ハヤテが、そう言つと

「「はい」「

白とヒナタは、返事した

「えーでは、これから第一開戦を開始しますね。対戦者2名を除く皆さん方は上の方へ移動して下さい。」

ハヤテに、言われ下に居た私達は上の方に向かった

「それでは…始めて下さい！」

「新雨隠れの里うずまき白行きます…！」

白は、そう言いヒナタに向かって行きヒナタも

「木の葉隠れの里日向ヒナタ行きます。」

同じくヒナタも白に向かって行きお互い体術勝負にする事になった

ルナ視点

第一開戦から、白熱した戦いだと思うヒナタは私達女子の同期の中で私と1、2位を争うぐらい強くて小さな時から一緒に居て鍛錬も一緒にしてネジさんとも良い勝負するぐらい強いしかもヒナタの相手が兄様のお嫁さんの白姉様なのだ。白姉様がどれくらい強いかは分からないけどどちらが勝っても私は二人と戦って見たいと思った

……

第三者視点

ようやく、試合が動きだした

『そろそろ、白が動きますね。』

シズナが、そう呟くとシズナの仲間のヒジリ達は頷いた

先に、動いたのはシズナが言った通り白だった

「そろそろ、行かせて貰いますね…」

白は、後ろに後退しヒナタにそう言い印を組み始め

「行きます、氷遁秘術：千殺水翔！！」

白が印を組み終わり水が無いのに氷の形をした千本をヒナタに向かわせたが

「はあああ、八卦掌回天！！」

ヒナタは、白の氷の千本を八卦掌回天で防いだが……

「氷遁秘術：魔鏡氷晶」

白は、八卦掌回天をして居るヒナタの周りに氷で出来た鏡を作り出しその中に入った

シズナ視点

やっぱり、氷遁秘術：魔鏡氷晶を出したか。あれに囲まれたなら術者を倒すか術者が解除しなければあの中からは出られないしかも白は原作と違って私や他のみんなやマダラの爺さんや師匠方と修業したのだから強さに関しては三忍より上ぐらいの強さだ。他のみんなもまた白と同じ位強い私はそれ以上強いがな。おっと、試合が終わった見たいだ

シズナ視点終了

第三者視点

「第一開戦 勝者は新雨隠れの里うずまき白…予選通過です。」

試合は、白が勝った魔鏡氷晶の中でヒナタが八卦掌回天を終わった時白が素早くあらゆる場所に作り出した魔鏡氷晶の氷鏡の中に入っ
ては他の氷鏡に移動しながら千本をヒナタの首に刺し仮死状態にした
と言う訳である

「ヒナタ！」

ヒナタの担当上忍の夕日紅は急いで上から瞬身の術を使いヒナタの
所に向かった

「あの、彼女は仮死状態になって居るだけですよ。」

白は、紅にヒナタの状態を教えた

「……………そうなのありがとう」

紅は、そう言いヒナタは医療班が連れて行き紅も後を追った

白は、ちょっとやり過ぎちゃったかなと思いながらシズナ達の居る場所に戻った

「えーでは、さっそく次の試合を始めますね！」

ハヤテが、そう言い上に居たシズナ達は掲示板を見た

表示された掲示板には波風ルナVSテンテンと出た

次回に続く

第十八章（後書き）

次回は、妹ルナとテンテンの戦いです。

第十九章（前書き）

ルナとテンテンの戦いです。

第十九章

こんにちは、前の戦いでうちの嫁が勝って嬉しいうずまきシズナです。

うちの嫁の白の試合の次が何と我が妹のルナだから嫁の白が試合をした時と同じくびっくりしています。

「それでは、第二回戦波風ルナ対テンテン前へ」

試験官のハヤテがそう言い、ルナとテンテンが前へ出て来た。

「テンテン先輩、勝たせてもらいますよ。」

「あら、私に勝ってる自信があるのルナ？」

「あります。」

「なら、この戦いで証明してみなさい。」

「では、試合開始！」

ルナとテンテンの戦いが始まった。

シズナ視点

やっと、ルナとテンテンの戦いが始まったか。

それにしても、ルナとテンテンの戦いは我が妹ルナが勝つな何たって中忍選抜第二試験の時に私が2日間ルナに修業したからね。それにルナにはあれを教えたから大丈夫でしょう？

シズナ視点終了

ルナ視点

中忍選抜第二試験中に自来也おじさんと同じ伝説の三忍の大蛇丸が私達第七班を襲って来た。

最初は、大蛇丸の術でサスケとサクラと別れてしまっただ蛇に襲われて大蛇のお腹の中に入れられたけど多重影分身を使って大蛇のお

腹の中から出てサスケ達と何とか合流出来たけどやっぱり大蛇丸が居てサスケが大蛇丸に巻物を渡そうとして何とか私がそれを阻止してサスケを殴った後大蛇丸が私に気に障る事を言い私はそれにキレて大蛇丸に向かって居たが逆にやられて地面に叩きつけられると思った時何か浮遊間を感じて目を開けて見てみたらそこには9年振りに見た私と同じ金髪で背中 of 辺りそれをポニーテールにして顔はヒアシおじさんからの写真と火影のおじいちゃんの住む家で見た写真と同じでまた私と同じ青空のような瞳で父四代目火影波風ミナト似のシズナ兄様が助けに来てくれて私はそれを確認すると気絶してしまった。

それから、何時間後気絶から目覚めた私は辺りを見渡して居たらシズナ兄様が来てあの後大蛇丸を退けてサスケとサクラと私をシズナ兄様の仲間と合流して今はシズナ兄様の仲間がサスケとサクラを鍛えていると聞いてシズナ兄様自身が私を鍛えてくれると言い後私に覚えさせたい術があると言い私はシズナ兄様と2日間だけ鍛えて貰った。

だから、シズナ兄様に鍛えて貰ったからテンテン先輩に勝って本戦に行きたいからテンテン先輩には悪いけど勝たせてもらいますよ？

ルナ視点終了

三人称視点

ルナとテンテンの戦いは、テンテンの武器攻撃オンパレードをそれを軽々く避けて影分身の術を使い影分身をテンテンに向かわせて攻撃させて居る間にルナは兄シズナから教わった術の準備を始めた。

ルナ視点

やっと、第二試験の時にシズナ兄様から教えて貰った螺旋丸を使う時が来た。

でも私が使う螺旋丸は、シズナ兄様によるとまだまだ完成では無く私の螺旋丸は今の所第三段階で螺旋丸に回転の威力を最大限まで圧縮出来ていない為まだまだだと言われたが使えない訳では無いと言われ私はその回転の威力の圧縮を最大限どうやって留めきるか考えて私はある方法を思い付いた。

ルナ視点終了

シズナ視点

ルナに教えた螺旋丸は、私から見て後少しと言う所まで完成して居るが回転の威力を最大限圧縮し留めきる事が出来ていなかった。

だが、私はルナなら螺旋丸を完全に使えるようになるかと信じて居る。そしてそれは、現実となった。

シズナ視点終了

三人称視点

ルナは、また影分身を出し自分の右手にチャクラを球体化させそれを留めさせて影分身は消えルナはテンテンに向かって行きそしてテンテンは螺旋丸を喰らって気絶した。

三人称視点終了

「勝者波風ルナー！」

「ハアハア（やったよシズナ兄様ー！）」

ルナは、シズナに向かってピースをしシズナも同じくルナにピースを返した。

「勝者は、上の観客席に戻って下さい。」

ルナは、ハヤテに言われテンテンの方を一瞬見て上に戻って行った。

「ゴホッゴホッでは、では次の試合を始めますね！」

ハヤテがそう言うと、シズナ達は掲示板を見た掲示板には………

………
うずまきシズナVSロック・リーと出た。

次回に続く!!

第十九章（後書き）

次回は、シズナとリーの戦いです。

第二十章改（前書き）

すいません、少し修正しました。

それでは、シズナとリーの試合話をどうぞ!!

第二十章改

こんにちは、ルナとテンテンとの試合が終わり次の試合がロック・リーとする事になったうずまきシズナです。

私は、掲示板に名前が出た瞬間瞬身の術で下に降り立った。

『（さて、どうするか？相手は忍術が使えないでしたね。なら私は一瞬で試合を終わらすー！）』

シズナが、リーとの試合を一瞬で終わらす事を心に決めた時リーも下に降りて来た。

「どなたか、存じ上げませんが勝ったせて貰いますよ。」

『ふむ、そうか。まずリー君と言ったかな？』

「はいそうですが……………」

『君には、悪いがこの試合一瞬で終わらせて貰うよ？』

それを、聞いた上に居た下忍達（上忍と新雨隠れの皆と妹ルナとサスケとサクラと三代目火影以外）は……………

「……………な、何を言って居るんだアイツ……………」

シズナの言葉に、呆れたり馬鹿にした様子だった。

一部の木の葉の下忍がシズナを馬鹿にして居るのを、見て居た新雨

隠れのシズナの仲間達は…

「ああ、あのおかつば君可哀想にシズナは一瞬で瞬殺すると言った
らやるからな……………」

「そうですね、シズナさんは私達以上に強いですからね。」

「…………あの、おかつば頭終わったな。」

「そうだなー!!」

「まあ、アイツとは長く付き合って居るが瞬殺するて滅多に言わな
いしな今回はおかつば君に冥福をお祈りするよー!!」

と、逆にリーを心配して居た。

ハヤテが、試合の合図を出した。

「では、第三回戦始めて下さいー!!」

そして、リーとシズナの一瞬で終わる試合が始まった。

シズナは、試合開始の瞬間リーの後ろに三代目火影や上の観客席で
シズナの試合を見て居る大蛇丸でも見えない瞬身の術を使って回り
込みリーの首裏に乱身衝を喰らわした。

ドサッ

リーは、何とか地面に膝を付いて居るが内心……………

「（Σ何で、体が動かない！！）」

リーが、何故自分の体が動かないかと思っているとシズナがリーに近づいて来た。

『君は、今何故自分、体が動かないかと思っっているだろ？それは私が先程君の首裏に乱身衝を喰らわしたからだよ。』

「何なのよ、乱身衝で！？」

下忍の一人の山中イノがシズナがリーに使った技が何なのか解らずイライラして居ると近くに居たカブトが説明し始めた。

「先程、シズナ君が使った技は乱身衝と言い体内のチャクラを電氣質に変換することで電場を生み出し先程のようにリー君の首裏から体内の神経系に流し込んで体の制御を攪乱させる技で医療忍術を応用した超高度な技でリー君はもうこの試合中は体が動かないからこの試合シズナ君の勝ちだよ。」

と、カブトはイノや一部の下忍達にシズナが使った乱身衝について説明した。

『君の負けだ、リー君負けを認めなさい。』

シズナは、リーにそう言いリーは考えて居た。

「（僕は、何て運が良いんだ。この試合は僕の負けだけど僕はまだまだ強く慣れると確信しました。）」

リーは、ハヤテに口パクで負けましたと宣言した。

「勝者つずまきシズナ!!」

ハヤテが、シズナの勝利宣言した後ガイが降りて来てリーを抱きしめた。

「リー、今回は相手が悪かったがお前は努力の天才である事を忘れるなよ!!」

ガイが、そう言うつもりはガイに口パクで……

「はい、ガイ先生!!」

と、ガイにそう言いリーはガイにお姫様抱っこで上の観客席に戻って居た。

「ゴホッ、では次の試合を始めます!!」

ハヤテが、そう言うつもりはまた掲示板を見た。

掲示板には、春野サクラVS山中イノと出た!!

私とヒジリは、それを見て……

「『(やっと、原作試合かよ/ですか!!)』」

と、心の中でそう思った。

次回に続く!!

第二十章改（後書き）

次の試合話は、サクラとイノの原作試合話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1509o/>

～ NARUTO ～ 最強転生小説九尾の申し子話

2011年4月23日16時11分発行